

○共栄学園短大生活学科助手 山田祐子 女子栄養大学（非）三善勝代

【目的・方法】第1報に同じ。本報告では勤労者の家庭生活に焦点をあて、労働時間と家事・育児時間の量的な関係について述べるとともに、個人調査票の自由記入欄の分析を通じて、質的な側面についても触れる。

【結果】①平日の家事・育児時間は男性より女性が長く、また男性は年齢による差が見られなかったのに対し、女性では30歳代から長くなる傾向が認められた。②家庭不在時間や実残業時間と家事・育児時間との間には、男性については相関がなかった。女性については、前者が長くなると後者の「2時間以上」層の割合は縮小するものの、「30分未満」の層が増えるわけではなかった。つまり労働時間と家事・育児の役割の間に直接的な関係はなかったと言える。③自由記入欄には、「仕事量が多いので、家庭はまるで母子家庭のようになっている」、「家庭を犠牲にしている」、「もっと家庭を大切にしたいと思うがそうも行かない」、「夫の仕事量が多いので心配」というような、職業生活が家庭生活にしわ寄せを与えているといった訴えが見られた。また、結婚・出産・子育てと仕事の両立の難しさを指摘する女性も多く、中には「結婚後も仕事を続けるつもり。出産のために仕事をやめ、収入がなくなるのは食わせてもらうことになって嫌なので、子供は欲しくありません」との記述もあった。